幸せな悪夢

トミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幸せな悪夢

【Ｎコード】
Ｎ７１９３Ｚ

【作者名】
トミー

【あらすじ】
平凡な少年の不思議な体験です。ホラー、と言うよりはファンタジーに近いかもしれません。ありがちな展開かもしれませんけど楽しんでいただければ幸いです。

夢と現実の境界

『プロローグ』

一人の少年がいた。どこにでもいる高校一年生。学校の成績は良くもなく悪くもない。運動も人並みにできる。特筆した才能なんてない。いわゆる『凡人』だ。

そんな少年が体験した“夏の思い出”である。

◇

第一章【はじまり】

照りつける日光、うるさいほどに鳴くセミの鳴き声、それとともに聞こえてくる耳障りな教師の声。

今日は夏休み前日、明日からは待ちに待った夏休みのはじまりだ。

教師は宿題はきちんとしてくるようにだとか、危ないところに行かないようにだとか言っているようだが、そんなことは俺の耳には全く届いていない。

俺は今日から夏休みをいかに楽しもうかと考えているだけだった。

（なにして遊ぶかな～？）

空を走る一筋の飛行機雲をボ～っと眺めながら夏の計画をたてていた。

「それじゃあ有意義な夏休みを過ごすように」

ようやく終わった教師の話。それとほぼ同時にちりじりに別れていく生徒たち。

「やっと終わったぜ」

他の生徒と同じように帰り支度を初めていると

「沢崎～」

後ろから俺の名前を呼ぶ気の抜けた声がする。
「相変わらず間抜けな声だな神谷」
こいつは俺の幼なじみの神谷慎吾。小学校からの腐れ縁だ。
「そういうお前は相変わらず失礼なヤツだな。まあいいや、さっさと帰ろうぜ」
「ああ、分かってるよ。今帰る準備してるからちょっと待て」
普段から置き勉している俺の机の中はまるでごみ箱のようになっている。夏休み前ともなると持ち帰る教材の量も他の生徒の3倍くらいあるのだ。
「ゲッ！　凄い量だな。ほとんどゴミじゃねえのか？」
「うるせえ！　これでも今日は少ない方だぞ」

「多いときのお前の机の中を見るのが恐ろしいよ」

「さてと、終わったぞ」

パンパンに膨らんだカバンを抱え教室を出る。予想以上のカバンの重さにまるで鉄球でも引きずっているように思えた。ただでさえ暑いのにカバンのせいで余計に暑い。このとき俺は決心した、もう置き勉するのはやめようと。

「沢崎、帰りにちょっと付き合ってほしいんだが」

「ん？　ああ、別に構わねえけどどこにだ？」

「映画だよ」

「またかよ、この間行ったばっかじゃねえか」

神谷は大の映画好きで新作が出るたびに行っているらしい。それだけならいいのだが問題はそ

れに毎回俺も付き合わされるということだ。

「そういうとこは普通女連れて行くもんじゃねえのか？」

「そんなヤツがいればお前を誘ったりしねえよ」

そんなにしょっちゅう映画を見る金が一体どこにあるというんだ？こいつの収入源を知りたい、そして俺にもその一部を分けてもらいたいものだ。

「で？　今度はどんな映画なんだ？」

「ホラーだよ、めちゃくちゃ怖いらしいぜ」

「ふ～ん」

「お？　なんだ？沢崎、もしかしてびびってんのか？」

「どうしてそうなる！」

まったく、何が嬉しくて男二人でホラー映画見に行かなきゃならんのだ。まあ、それをいつも断らないでついて行くのは映画の料金がこいつのおごりだからだ。マジでこいつの金の出どころはどこだよ？と気にしつつくだらない話をしながらしばらく歩いて学校近くの映画館に着いた。

「結構混んでるな」

「文句言ってもしゃあねえだろ、ほれ」

神谷は用意していたチケットを俺に手渡した。そのチケットを係員に見せて俺達は館内に入って行った。チケットに書いてある席に座り映画が始まるのを待つ。そこまではよかったのだが問題はその後だった。　映画が始まるやいなや隣に座っている神谷はギャーとかワーとか女み

たいな悲鳴をあげている。

（怖いなら見なきゃいいのに）

終わってみれば神谷の悲鳴のせいで映画の内容は一つも分からなかった。

結局、俺は何をしにきたんだろう？

無駄な時間の浪費だった。もうこいつとは二度と映画に来ないようにしよう。

「イヤ〜、怖かったけど面白かったな」

「ああ、そうだな」

おごってもらった手前、文句も言えないので適当に相づちをうっておいた。

映画館を出てみると外はもう日が沈み、綺麗な満月が顔を見せていた。

「それじゃあ、俺はこっちだから。今日は付き合ってくれてサンキュー」

そう言って神谷は帰って行った。

「はあ～、さてと俺も帰るとするか」

今日は疲れた。

早く帰って寝たい、そう思いながら駆け足で家路を急ぐ。普段歩いている学校の帰り道も日が降りると全く別の顔を見せている。

しかし、そのとき俺は奇妙な感覚に襲われた。まるで背中を無数のナメクジがはい回るような悪寒。体中に鳥肌がたっていた。夏だというのに体が震える。

気がつくと俺はさっきまでにぎやかだった大通りを外れ、人気のない狭い路地に迷いこんでいた。

「あれ？おかしいな、こんなところで道に迷うはずがないんだが」

俺が今歩いているのはよく知った学校近くの映画館から家への帰り道……のはずなのだが、こんな道は初めて通る。

「くっそ～、どこなんだよ！？ここは」

行けども行けども暗闇が続くばかりだ。

「何なんだこれは！？」

と、そのとき

「あなた、道に迷ったの？」

「え？」

突然の声に俺は何が起きたのか分からず、声の聞こえてきた方へと振り向いた。そして、そこにいたものを見て再び俺は恐怖を覚えた。

俺に声をかけてきたのは少女だった。ただの少女ではない。黒のローブ、黒く長い髪、黒い瞳。まるで、背景に溶け込むような漆黒、そし

て、それとは対称的に透き通るような白い肌をした少女。年齢は俺とさして変わらないように見える。

だが俺が恐怖したのはそいつの外見ではなく、こいつがどこから現れ、いつからここにいるかということだった。

「あなた、道に迷ったの？」

漆黒の少女は同じ言葉を繰り返す。

俺は直感的にこいつが危険な存在であると感じた。だが、そうだと分かっているにもかかわらず、なぜだか体は金縛りにあったように動かなかった。

「誰なんだ？お前は」

少女は俺の質問をバカにしたようにクスクスと笑っている。

「誰も自分が何者なのかなんて知ることはできないわ」

何なんだこいつは？頭いかれてんのか？

「悪いけど急いでるんだ。そういう話なら他をあたってくれ」

少女は再びフフと不気味な笑みを浮かべた。

そして少女は俺の方へゆっくりと近づいてくる。

「残念だけど私の方はあなたに用があるのよ」

そう言うと少女は俺の顔にその真っ白な手を当ててきた。

「冷たっ！！」

俺の頬に当てられた手はまるで氷のように冷たかった。そこで俺の意識は途切れた。俺が最後に見たものは不気味に笑う少女の顔だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7193z/

幸せな悪夢

2011年12月23日23時51分発行